

学習意欲を高める毛筆指導 —書写を専門とされない先生方へ—

長崎県西彼杵郡時津町立時津中学校教諭 本田由人 ほんだよしと

1 実践の趣旨

書写指導をどのように行えばいいのか。それは、教師自身が、いわゆる「書の技術」を持つていることが重要ではあるが、「書の技術」を持つていなくても、意欲的に書写学習に取り組ませることはできる。

「名選手は必ずしも名監督にあらず」というプロ野球の言葉があるが、実際に、プロ野球の名監督と言われた人の中には、現役時代は一流選手ではなかった場合がある。では、なぜ名監督になり得たのか。それは、選手のことをよく見て、考え、工夫を凝らした指導を行ったからにはかない。

書写指導も同じである。高い技術を持つた者がいい指導ができるかといえばそうでもない。生徒のことを考えて、常

2 指導の実際

①「永字八法」について

「永字八法」とは、漢字の「永」の字には、「点・横画・縦画・はね・右上がりの横画・左はらい・短い左はらい・右はらい」(※筆順通り)という、書に必要な八つの技法がすべて含まれているということを表した言葉である。

私が、中学一年生の最初の書写の授業の時に必ず書かせることは、この「永」の字である。しかも、半紙を一枚しか使わない。つまり、一発勝負なのである。

し、歓声があがる。この活動は、文字は違うが、一度に相互評価ができるという点で有効な学習活動である。

③ 筆ペンによる学習

選択教科としての国語において、私は迷うことなく「筆ペンによる学習」を行うことにしている。(筆ペンは各自で用意させる。)なぜならば、筆ペンに慣れることによって、実

社会での場面や(のし紙や芳名帳など)、生涯学習という観点で有効だからである。

なお、筆ペンにはさまざまな種類があるが、中字の毛筆タイプがいいように思う。(本体が約四百円、替カートリッジが約百五十円と、比較的手に入れやすい。)

なぜ毛筆タイプがお勧めなのかというと、毛筆タイプのほうが、本物の小筆を使ったときのように書けるからである。しかも、準備や後片付けの時間を必要としない。私は二十年来、この方法で指導している。内容は、祝儀・不祝儀袋の書き方を学んだり、自

その作品は年度末まで保管しておく。そして、最後の書写の授業の時に再び「永」の字を書かせ、最初の作品と比較する。(もちろん、半紙は一枚しか使わない。)すると、明らかに技能が上達しているのがわかる。

このようにすることによって、生徒たちは、「一年間きちんと取り組み、上手になるんだ。」と実感することができ、今まで苦手意識があった生徒も、その後の書写学習に意欲的に取り組みことができる。つまり、一年間かかるものの、「やればできる」ということを実感させることが重要なのである。

② いろは歌を書く

一年生の書写学習の中に、必ずと言っていいほど「平仮名の学習」がある。大筆で練習するのが当然だが、私は、あえて小筆での学習を中心に指導している。その学習とは、半紙を横置きにして、六文字八行(四十八文字)に折らせてから「いろは歌」を各自で書かせるということである。

しかし、ここからポイントである。生徒一人ひとりに一文字または二文字を割り当て、生徒は割り当てられた文字をひたすら練習し、最も良く書けた部分を

作の俳句を色紙に書いたりすることである。俳句を色紙に書く際には、五・七・五の三分分ち書きで取り組ませてきた。できれば、楷書を単純に並べるよりも、行書による連綿(文字を繋げて書くこと)を用いて書いた方が、より作品らしく見栄えがする。

③ 成果と課題

昔、書の基本は「永字八法」と言われてきたが、現在はほとんど取り組まれていないように思う。「新しい書写実践の試み」といいながら、あえてひと昔前の方法をとっているのは、この方法は普遍的なものであると思っているからである。

書写学習において、最初から何か特別な方法、人とは違った、変わった方法をとるよりも、書の原点に戻り、基礎・基本をしっかり学習する。そして、それを身につけた上で、発展的な学習として筆ペンなどを用いて、生涯学習的な取り組みを行ったほうがよほほいいように思う。

最後に、筆ペンでの学習を行ったことで、筆ペンそのものに興味を示し、板書したことをノートにとる際に、単元名などを筆ペンで書く生徒が何人も現れるものだというのを付け加えておく。

ゑ	さ	け	る	つ	わ	と	い
ひ	き	ふ	の	ね	か	ち	ろ
も	ゆ	こ	お	な	よ	り	は
せ	め	え	く	ら	た	ぬ	に
す	み	て	や	む	れ	る	ほ
ん	し	あ	ま	う	そ	を	へ

▶一年〇組のいろは歌